昭和43年度

冬山合宿

報告書

信州大学山岳会
長野山岳部

目次

冬山合宿を終えて
冬山合宿概要
冬山合宿行動概要
合宿記録
各係反省
個人反省

冬山合宿を終えて、

C.L 吉安崩夫

入山前からこの合宿にかけるファイトは全員並々ならぬものがあった。しかし数名にも及ぶ風邪ひきはどうしたものか、やっぱり入山までにして、気のゆるみをなくし自分のコンディション作りに万全を尽してもらいたいものである。入山と共に発熱したり、行動不能になる者が生ずるのである。

BCを作りさてC1入りとした時から天候は荒れだし、結局五竜岳までのポッカと、その回収だけに終ってしまった。10日間近くも強風、視界50m以下では、行動に限界があると思われる。決して部員の力の低下だけではないと思われる。又荒天の為だけとも思われぬ。普段からのトレーニング、ルート研究が大切である。晴天時なら今の部員の力としたらどこへでも行けるだろう。しかしいつも最悪の場合を想定して、晴天時にルートの確認等注意深くみておく事が大切である。

一年生諸君は五竜岳の途中までしか行動できなかったが、決して落胆してはならぬ。あの強風の中でのテント生活、又冬山の厳しさというものを充分身をもって体験したと思う。冬山とは根本的にはこういう天候である事を認識し、今後上級生になるにつれてこの経験を生かして頂きたい。

冬山基礎技術であるがこれはアイゼン、ワッペ、ピークハントだけの事ではない。狭いテントの中でいかに自主的に自分の立場を見いだし行動するか、より住みよいテント生活をするかのいわゆるテントワークが大切である。沈下続く沈で嫌というほど身にしみたと思うが、やはり自主性というものが欠けている。簡単にいうと「ズク」というものである。得てして「俺がやら今くても」という気持が起る。これをどのように克服するか、それが注意深い雑さのないテントワークになる。ナベ、火器の扱いにも現われるのである。一回注意うけたなら二度と繰り返さないでもらいたい。

頂上に立つには、いろいろ様々な要素を克服してこそ始めて喜びが生ずる。決してわろそかにしないでもらいたい。

底倉は遠かった。本当に遠かった。しかし諸君はピークを踏む以上に大切な経験をしたのである。

又登山そのものは社会的に責任がある事も初めとした遭難事故からはっきり認識したと思う(勿論それ以前にもわかりきった事であったと思うが)。どんな事をするにも社会的な責任がある我々が行おうとしている登山にも謙虚な立場にたって自分を見つめ、行動してこそ真の登山となり、より自己に密接した登山活動ができるのではないだろうか。

深い反省の上に立ち、今後も素晴らしい山行をしよう。これに耐える強い体力、精神力と、いつどんな時にも謙虚な態度を忘れぬよう期待します。

冬山合宿概要

1 目的
- ヤミボーラー法による遠見尾根より鹿島槍ヶ岳アタック.
- 積雪期登山基礎技術の修得.

II 場所
- 遠見尾根－鹿島槍ヶ岳、唐松岳周辺.

III 方法
- ヤミボーラー法.

IV 期日
- 昭和43年12月25日～昭和44年1月9日.

V 参加者.

C.L	吉安尚夫	市野和夫
S.L	山田正弘	荒井富夫
	駒井　浩	小杉典夫
	大野照幸	小林元紀(12/30～1/9)
	吉野英夫	大谷　敬(12/25～12/27)
	井口隆夫	南瀬健治(12/25～12/27).

請ふ瞬(またた)かずして見よ。今富士の巓(いただき)に

かかりし紅霞(こうか)は見るが内に富士の映

闇を追ひ下るし行くなり。

一分.― 二分,― 肩― 胸。

見よ,天邊に立つ珊瑚の富士を。

桃色に匂ふ雪の肩,山は透き徹流

とすなり.

―自然に対する五分時―

徳冨蘆花より.

冬山合宿行動概要

		長野	神城スキー場	地蔵小屋	遠見コル	西遠見	白岳	五竜小屋(BC)	五竜岳	唐松岳	備考
1	12/25	→	→	→	→	→	→	→	→	→	入山者11名 スキー場に120kgデポ
2	12/26		→	→	→	→					デポ回収・山田・大野・駒井・荒井・岡崎・小形 デポ吉宮・吉野・大谷・井口・市野
3	12/27			→	→	→					大谷・岡崎・下山
4	12/28					→	→				C1隊：山田・駒井・吉野・大野 BC隊：吉宮・井口・荒井・市野・小形
5	12/29					→	→	→			五竜小屋まで 両隊ダブルボッカ
6	12/30							→	→		フィックスデポ：山田・駒井・大野・吉野・井口 1年生ファイル割課・栄田OB小林入山
7	12/31						沈				
8	1/1						沈				栄田OB下山
9	1/2						沈				
10	1/3						沈				
11	1/4							→	→		C1隊：吉宮・山田・吉野・井口 駒井・小林・大野・1年生・五竜岳の金平まで
12	1/5						沈				
13	1/6						沈				テント撤収・五竜小屋へ
14	1/7						→	→			金頭・白岳ピーク400m下まで
15	1/8						→	→			白岳斜面偵察 午後：小林・駒井・井口・千飯・山田・大野・吉野
16	1/9	←	←	←	←	←	←	←			

合宿記録

12月25日

3:40 全員音守方で起床

4:00 essen・小林兄が炊き出し

6:12 マイクロバスにて部屋より神城スキー場へ

7:55 神城スキー場到着

小屋125kgデポ

① 8:50～9:25 ここでゴーグルをつけ、第一回essen

② 9:45～10:35 この少し手前で荒井川に落ちる

③ 10:45～11:35 第二回essen

④ 11:45～12:50 小屋少し手前

⑤ 13:00～13:55

⑥ 14:05～14:30 法大小屋着

⑦ 14:45～15:35 地蔵の頭と小遠見の間のコル着

17:50 essen

19:30 就寝

1ピッチより向瀬川邪の為バラる。同行(3)パーティ非常に多く4ピッチより荒井がバラる。同行パーティもバラる者があり、おおいに順番のいれかわりが激しく無駄であったと思う。入山第一日目の為か、テントを張るのも遅く。今日は天気がよかったので助かったが、これが秋線だとツゴかれることになると思う。

気象

時間	10:35	13:00
天気	薄曇	薄曇
風力	0	0
気温	6°C	2°C
雪温	1°C	0.5°C
雪質	気温が高い為に表面は水分多いが内部は軽い雪	

12月26日

デポ回収party　member (L)山田 駒井 大野 小杉 向瀬 荒井

① 6:45～7:35

② 7:55～8:20 神城スキー ヒュッテ

③ 9:10～10:03 最後の水場

④ 10:13～11:10 鉄塔横

⑤ 11:37～12:10 遠見小屋・(ワッパをつける)

⑥ 12:15～13:20

気象 ⊙時々⊛

①,②ピッチは下りの為快調.
③ピッチ、雨潮少しバテるが快調.
④ピッチ. 急な登りの為バテるも必死で頑張る
⑤ピッチ 小屋よりテン場までラッセル練習でしごかれる

西遠見荷上げ party.

4:30 essen 起床
5:35 essen
6:50 テン場出発
7:30 / 7:40 } 1本
8:20 / 8:45 } 1本
9:25 / 9:45 } 中遠見で1本.昼食
10:35 / 10:40 } 大遠見1本
11:05 / 11:20 } 西遠見でデポする. 二本のヒマラヤ杉の杭.
12:10 / 12:15 } 小遠見中遠見コル.1本.
12:50 テン場着

天気・曇のち小雪. 雪は湿っており, 南風も吹き暖い冬山である. ナダレは全然なし, 積雪も多くはない.

行動感想.
小遠見までは. 前のトレースが風の影響で消え, 不規則なラッセルとなりしごかれる. 稜線は常にガスり悪天が予想される. 行動としては良い方であり. 足の故障で少々バテた者もいる. 全員よく頑張る.

気象

時間	7:30	9:00	11:00	13:30	15:30
天候	曇	曇	雪	雪	雪
風力	0	0	1	1	0
風向	/	/	東	東	/
気温	2°C	4°C	5.5°C	6°C	1°C
雪温	-1°C	0°C	1°C	1°C	1°C
雪質	湿	湿	湿	湿	湿

地蔵より出発した時は粉雪であったが, 途中から南風が吹き出し, とたんに重い雪となり, 小遠見より下のラッセル路は湿った雪で, 完全に風くなっていた。テン場についてからは無風でボタン雪が降って来た。

12月27日

4:10 essen当番起床.
7:15 出発
7:45 / 8:10 小遠見への稜線1本.荒井packing直す.
8:45 / 9:10 小遠見手前500mの稜線.
9:45 / 10:10 中遠見(昼食)
10:55 / 11:05 大遠見手前
11:30 前日デポ地点通過.
11:50 TS(西遠見手前.稜線上)着.
大の.吉の.井口.ふ杉.市野でデポ回収.
4:30 essen.
7:00 消灯.

ラッセルは全くなく、時々出る太陽に寒用も忘れさせられる。鹿島、五竜と月の前にする、雄大に白い姿をうかべ、意欲をりきたゝせる、早くBCへ入りたい。メチコには全く会りず、里のOO子はどうしているか、心配タ——

気象

	7:15	7:45	8:45	9:45	10:45	11:45
天候	⊗	小雪⊗	①	◎	◎	◎
気温	-8.5℃	-0.5℃	-1℃	-1℃	4℃	-2℃
雪温	-1℃	-1℃	-1.5℃	2	0.5℃	-3℃
風力		微風	3	2	弱i	弱i
風向			N.E	N		S

降雪はかなり湿っており嫌な気分がする。9:30頃より気温上昇i、ナダレに気をくばる。白馬方面のレンズ雲、中層雲のなりゆきが心配だ。テンバに来てから降雪。後立稜線はガスの中、

12月28日

B.C隊 吉安.井口.荒井.市野(小杉は月那の為テントに残る)
5:15 essen.
7:05 テン場出
8:00 1本.

8:55 白岳山頂
9:00 山頂より少し下ってテントを張る
9:40 ボッカ隊下山
10:10 テン場

今日は行動が早く終って、テントの中でcome come で時間をつぶす。チーズ1本かせいだ。(上級生は羽いれェ)
風のものすごかったこと。ホッペタがひりひりした。

気象

	7:00	15:00
天気	晴れ	吹雪
気温	-5℃	-7℃
風力	/	4
風向	/	北

温度計をこわしてしまい、雪温計で調べている。テントのバタバタしている音をさくと外へ出るズックがなくなってしまう。
気象係として、かっとズックを出して頑張らねばなるまい。

手袋に関する研究発表　市野和雄
入山前に薄い手袋を1つ長野市内の衣料店で買った。婦人物で肌ざわりは満点。この手袋でラッセルをやった結果、みるみるうちに縮んで、1日でオレにかわいい手が入らなくなってしまった。この価格は120円でありました。
山へ持ってくる手袋は120円以上の物を使用しなければならない。
以上研究発表　おわり

第1隊　山田、駒井、大野吉野
4:00 起床　①
7:10 ①、西遠見テン場出発。今日からC1隊とBC隊とは別行動をとる事となり、C隊は五竜小屋へ設営、BC隊はボッカ
8:00 1時㊏、風強い。1本白岳の登り。昨夜降雪30cmあり、先
8:10 行パーティのトレース有りそれ伝いに行く。
8:50 ㊏風強い、白岳を登り敗線でるも風雪強く、小屋へ行くのを断念、白岳near手前100mのcol状の所へ設営する事に成る。
設営完了後、BC、ボッカ隊は下りへ、我々はテントへ早々に入る。

外は相変らず大雪、風も時に吹くがここは余りない絶好のテン場だが 平川側はスッパリ切り落ちているので気をつけなければいけない。essenまでる人さっそく「ユイコイ」をする。全く楽しそうにやっている。夜はスキヤキで 皆喚声。今冬のessenは段々良くできている。

12月29日
B·C隊
5:30 朝食、天気の様子をみて行動をきめる。
8:20 出発
9:15 白丸の下、休
9:45 五竜小屋
9:55 下る
10:20 テン場
11:20 } テント撤収して出発
12:20
2:10 五竜小屋

気象 8:20 ◎ 9:15 ◎ 13:20 小雪

C1隊
朝起床、風行とんどなく、視界5~10m 偵察により行動とする。
出発 1人約10~20kg
行動① 約10分
天場設営 五竜小屋の南のコル、設営中、B·C隊デポに来る。
行動② 前日のテン場までデポ回収に行く
行動③ 天幕の横にキジ場を作る。

気象 a.m. 7:00頃まで白岳peak下 遠見側は風弱く又無風
晴霧のみ濃く視界5~10m
降雪 20cm 足らず。

レーションはやはり1日1packに必ずすること、その為には早期段階で努力が必要
C1用天幕内のムード上級生ばかりのためかなごやかな雰囲気
4人で丁度 5人なら狭い感じ。

2月30日.

B.C.隊

5:30 essen.
10:00 雪洞堀り
11:30 昼食.
13:00 アイゼンワーク, ラッセル訓練(白岳北東面, 五竜小屋付近)
14:00 テント場
16:30 夕食.

C1隊.

10:30. 出発、風はやはり強いが, 陽が射し初め行動となる.
五竜にfixに向う. 雪の状態はかなり安定しており.
アイゼンが快調に効く、
11:40. 五竜頂上.
長島側へ少し降りたところへデポをする. 頂上の下,
(唐松側)に20m fixする.
13:30 B.C着.

柴田OB. 小林入山.
天気図による予想が全然当たらない。9時すぎにガスが晴れはじめ, 5:00頃まで続いた.

2月31日.

4:50. essen. 一面ガスっていて. 風が強く杯子まち.
10:00 ~ 12:00 昼essen. チャパティーをゆっくり作って食べる.
11:00 柴田OB下山. 小林. 井口白岳下まで見送り.
18:30. essen.
20:00. 就寝. 紅白歌合戦を聞く.

大陸の方に1066mb. 1080mbの高気圧があり. 完全な冬型の気圧配置でものすごい吹き出し. 1日中降雪. 積雪50cm.
相変らず「コイコイ」が盛んで小説を読む者もいる. 恒例の紅白歌合戦をシュラフの中で聞くとこんなところでも大晦日の感じがでてきた。

月1日(昭和44年)

西高東低の冬型で. 風雪強く沈澱と決定. 正月ということで昼食のお汁粉をBC.C1合同で食べ. 日本酒でカンパイ。沈澱が続きなれあいムードで. 登攀意欲が欠けてきたようだ.
五竜小屋付近は. 降雪が激しい. 季節の吹出しは強いはずであるが. 時々弱い時がある. これは地形的関係か.

1月2日

5:30、朝食。山岳気象とはいっても、いっこうに西高東低の気圧配置はくずれず沈殿。

三中の風は昨夜ほどではないが、ここ3日間というもの視界は50mと晴れず、わずかに8時頃白岳peakが見えたがすぐガスの中。テントの中では何もすることなくコイコイが唯一の遊び。

今日はタバコの移動が激しい。

あーーあ。クッラ、ネラ、ダッテのくりかえし。今頃下界では正月気分でうきうきしているだろうか。

気象	8:00	14:30	16:00
天候	⊗	⊗	⊗
風向	N.W	N.W	N.W
気温	-13℃	-9℃	-13℃
雪温	-6℃	-7℃	-6℃

1月3日

半沈殿

B.C隊 昼飯を終えてから五竜方面に散歩に行くが、荒井リューマチが激しく中止。テン場に戻って白岳へ散歩、風雪が強くなる。白岳のpeakは雪庇が出来ていた。聖大のテン場跡で週刊誌を見つけ大ヨロコビ!!

G1隊、五竜岳の偵察。山田、大野、駒井。

10:30頃出発。風は思ったより弱く、雪も軽に落ちたり溜んだりしている部分もある。しかしクラストは割れ易く、その下の部分は接着性のない乾いた砂状な半分雪である。G1のキおのピナクルまで行ってみたが雪崩の危険を感じ引き返す。

気象

視界－最高150m位　最悪－5m位

雪－旧雪層の表面がウィンドクラストして内部が乾燥したザラメ状となり、そのウィンドクラストの上に湿った新雪が積っており、非常に不安定。ヒザまでもぐる所で亀裂が1m位走る。ラッセルは多い所で1.2m位。リッジ沿いは殆どラッセルなしだが雪崩の危険はある。雪庇は余り大きくない。

風－ごく普通の冷たさで、さ程強くはないが、キスリングを背負えば上級生でもふらついる者がいるのではないかと思う。

太陽－遂に太陽があるなんて事忘れちまったよ!

1月4日

B.C隊…大野、駒井、小林、山田、荒井、中野、小杉

G1隊のサポートを兼ねて五竜アタックを狙う。しかしG1の少し手前まで行くも風雪厳しく、視界も悪い(3~5m)ので、引き返す。

C1隊に別れを告げ、クレモナで2回fixして帰る。雪は昨日より更に深ってきた。

C1隊、吉安・山田・大野・井口、

BC隊と別れた後C1へ向え、五竜peakの手前は深いラッセル。その中で今年はじめてガスの中でオテントウ林がチラッと2度素顔ではないが見せてくれた。テントを取り、さて下りにかかるも雪でルートは消え、おまけにガスと強風で道路をはずされる。しかたなくテントのすべてを回収して、BCに戻る事にする。しかし下りにはガスと風が更に強くなり、日出帽の間が水ぶくれ全員眼の付近に凍症をうける。とにかくBCに戻るのが精一杯吉安、吉野、井口は冬期小屋にはいりソェルターをかぶる。

8:15 出発

9:30 五竜下

12:40 BC

気象

移動高らしきものが発生しているのに好天の兆あらず、逆に吹き出しが激しいのは高気圧が強いせいか？もしそうだとすれば、これが頭上にこしかゝった時から通り過ぎて後暫らくが唯一のチャンスとなろう。相変らず降雪、風共に激しい。今日は雪崩の跡が所々にあった。

	9:00	12:00	15:00	18:00
天候	⊗	⊗	⊗	⊗
気温	-18℃	-16℃	-12℃	-8℃
雪温	-17℃	-17℃	-10℃	-6℃

1月5日

移動高になると思っていたHは、日本のはるか南岸に去り、しかも日本海北部にはHがあるのになんと強い風が。天気図をみても明日を除いてよくなる気配なし。一番主はどこへも行けずさぞ残念だろうが、上級生にしてもそのとうり、冬山とは何てしてこういう結果に終る。又の機会もあろう。

こういう冬山も自分のものとするならば、更に充実した計画と強じんな体力、精神力をつけることを感ずるだろう。今回の合宿は、BCを設営した後すべて流というような恰好だったが、ラッセル、吹雪の中の行動がどれだけ厳しいものか忘れないで欲しい。しかし何といっても、C1さえも出さなかった事であり又我々の力なさをもみせてくれたようでもある。天気が予想以上に悪かった事もある。2月の晴天がニニたきて爆発したようである。

1月6日
B.C.行動記録
4:00 エッセン係起床
6:00 エッセン
7:00 テント撤収開始
9:20 冬期五竜小屋全員集合終
12:00 山田(L)大野,吉野白岳付近へ偵察に行く。
白岳を降りた所より下はほとんど風がなく暖く。ただし新雪はフワフワと多く積りちょっとうす気味悪いが降りられそう。でも明日は大雪,雪崩注意報が出ているのでやっぱり心配だ。昼のエッセンはぞう煮C1の連中といっしょだ。夕のエッセンはクレー汁。
9:00 就消燈

風よふけ, もっともっと強く,
雪を飛ばせ,
小屋を飛ばせ,
人間もついでだ
全てをふきとばしてしまえ
雪よふれ もっともっと激しく
山をうめる
小屋をうめる
人間もついでだ
全てをうめてしまえ
後に残るのはなんだ
唯美しい自然があるだけ
その下に人間や小屋をかくして

1月7日
7:30 五竜小屋発
白岳まではすごい強風。視界はほとんどない。白岳下のトラバースまで行くが,視界は全く無くものすごい積雪のため小屋まで引返す。どう言ってよいかともかくひどい雪と風。そのため右目の下を凍傷にかかってしまった。ラジオでも北アで30パーティ孤立とのこと,新記録の8日間連続,大雪雪崩注意報ラッセルの最中,雪崩に対して非常な恐怖を覚えた。

1月8日
昨夜からの風が相変らず強い。7:00 駒井,井口,小林3名で白岳の下山ルートを偵察に行く。風は強いが見とおし(視界)は昨日よりずっと良い。雪は昨日より大分しまっていた。赤旗どう

りに下り，きのうより少し上をトラバース，リッジどうしにおりる。きのうごいキレリが走っている。駒井さん，井口はキレリに入りこみヒヤッとする。途中で助けてぐれ”のコールにびっくりする。会ってみると2日前に小屋を出た連中が下山ルートわからず小屋へもどるとのこと，全員が元気とのことでホッとする。上の方を見ると稜線が見えるが下方は全然みえず西遠見への下山ルートがどうしても確認出来ず引き返す。

12:00すぎ 山田，大野，吉野で再度偵察に行く。しかしみとうしは昼前よりも良くならず下山ルートはやはり確認出来ず引返す。ちょっとでいいから西遠見が姿を見せてくれたらなあ！ 途中であった連中に聞いたら昨日皆が下山途中引返した地点で10分位後でナダレの音がしたとか返事もできず。その地点へいってみると表層ナダレのあとがみえた。全く危機一髪というわけだった。

1月9日

視界昨日より良好，昨夜の協議の結果稜線通し唐松岳経由で下山する予定であったが白岳のピークより下を見ると白岳沢の視界も良くこちらを下ることにする。雪は深いが変化でラッセルに精を出す。白岳と西遠見のコルまでくると上の風はウソのようだった。皆の顔に安どの色が浮ぶ。敗退の念をいだき左がら夕暮神城駅に着く。

各係反省

食料係

食料を軽くしようと努めた。でもあまりこれにこだわりす
て質のない料理となってしまった様である。又,カロリー
量の問題も考えさせられてしまった。地殿日に行動日よ
も内容をおとした事も少し問題があると思う。
準備での遅れのため皆様に大変御迷惑をかけました。
これからの食料計画等皆様の協力を得て一層研究して完璧
ものにしたいと望んでおります。 (小

装備係

積雪期山行の装備の軽量化……このスローガンもスロー
で終った。もちろん我々のズフの無さもその因だろう
りに外的条件が限定されていることも見のがせない。
その他設営用具,トハン具等市販のものに頼っているの
ら。今思う事はある程度絶対的な重量に対してはボッ
によりその策とするのが取り得る唯一の可能の手段で
という事だ。
個人の反省としてはガソリン量算出方法の一考(l/人日よ
内張使用の可否などがある。今后さらに研究したい。
未だ用具の使用が不手極である。最底度の技術は身え
ば山へ行けない。この点を再認識して今后に生かし
以上簡単ですが (中

記録係

初めに報告書の発行が遅れたことを皆様にお詫びします
今回は,大学ノートを二冊B.C.用,C1用として上げ直接山で
に記録をとってもらいました。
ねらいは,今まで報告書作りの時各人が別々に記録を提
いましたが,そのわずらわしさ,重複をさけることにあ
的なものとして現地で書いた記録というものは生々
良いのではないかと考えた為です。欲を言えばノート
だまだ空白部分が多いので皆ズクを出してもう少し
ほしかったです。
今後もこんなノートを合宿に持って行く事と思われま
クをおしまず立派な記録を残すべきと考えます。
(

会計報告

収入

5,250 × 12人 = 63,000

4,000 × 1人 = 4,000

1,000（宇都宮）

500（柴田）

500（下倉）

4,000 部費より

73,000 円

支出

1. 遭対費	100 × 14人 = 1,400
2. 装備	14,278
3. 食料	36,516
4. 交通費	9,128
5. その他	900
6. 返済金	5,500
	67,722

残高

73,000 − 67,722 = 5278

返済金 400 × 13人 = 5,200

残り 78円 → 部費へ

個人反省

駒井

これが冬山の本来の姿であろう。遭難パーティの発どが、「異常な悪天候に見舞われ----」と語っているがむしろ例年が冬山としては好条件に恵まれていたのであろう。冬山は厳しいとか何とか言いながら実際にはナメていたのである。従って"計画通り動く"事に値打ちがあるのだと思う。

今回の合宿では個人的には非常に充実感をもった上に、全員の経験という事を考えても益多い合宿であったと思う。しかし入山者中五竜岳を踏んだのが僅か6人、G5とのコルまで行った者もないという状態は結果から言えば良かったようなものの、初期の条件から考えれば心残りであり合宿の失敗を示しているであろう。とにかく非常に有意義で楽しい合宿

でした。

吉安

日本の冬山程天気図からの判断はむずかしいものはない。今までこういう天気が多かったから今日もこういう具合になるだろうなんて全然ナンセンス。又出版されている本にしてもしかし、こういう天気図の時に遭難しているなんて事ばかりかきやがってその時の山の天気はどうであったか又登山者の気持ちはどうであったか全然わかっちゃあいない。だいたいにおいて下界でノホホンとしてそして遭難がどうのこうのといってる奴ほど気にくはない奴はいない。

勿論彼らにもいいたい事があろう。冷静な態度と沈着な行動。そして強い体力と精神力。そのどれが欠けても遭難という事実に結びつくだろう。(特に冬山では)

しかし、我々にはそれに向うもっともっと強い意志を忘れないでほしい。

山田

冬山はきびしい。これが山から下りて一番痛切に感じた事だった。あの厳寒の寒さ、雪の多い事、我々は見事に敗退したがあの過酷な自然の中での16日間の雪上生活、行動の経験は大きなものだと思います。

一つの冬山は終りました。

これをワンステップにしてもっともっと行動する事が望まれます。

大野

第一に感じたことは自然の偉大さである。人間共はいくら騒いだところで御仏の手の内から出られないのと同じことである。後は浦松氏言わくの"克己心"次第で決まる。もし今回がここ数年来のような冬山の状態ならば我々の現状で充分にアタックできた。しかし、今回C建設もできなかったことは技術云々というよりもっと大切な、精神面での甘さが暴露したといえよう。しかしこれは今まで精神的なものが軽んじられてきたからというのでは

い、部の登山に於いても、平素の生活に於いても、"人間というものを極限に追いつめる経験をしたことがなかったからである。坊ちゃん育ちの弱い面が少し顔を出したのかもしれない。'67の加藤さんの遭難、今回の冬山、これらの経験を通して技術を発揮する原動力なるものが次第にわかりかけてきたようだ。

もう1つ、特に1年部員諸君に対して合宿中にでも、普段の部生活に於いてでも常に"何故か"と疑問を持って行動して欲しいそれは自分で考える態度に通じてくる。冬山合宿が終り、反省会を持った席上、総括反省の時、5人とも一言も物言わずで終った。でも各係反省の時には発言をしていた。その違いは自分が主体になって取組んだかどうかの違いである。君達の心の片隅に"上級生についていく"という気持が無かったかどうか、考えて欲しい。合宿とは新人といえども"上級生に連れて行って貰うもの"ではない強制参加でなく自主参加が合宿本来の建前である、ことを認識して欲しい。

山行に於ける体制は上級生下級生と分けられるものでなく、リーダー、メンバーと分けるのが本筋である。君達もメンバーの一員なのだから、唯のほほんと上級生の後に従っているだけではいけない、1つ1つの行動、リーダーの判断に対して"どうしてなのか"と疑問を持ち自分で考える態度を身に付けて頂きたい。

'69 1/25 pm 8:00

大谷

はなはだ残念なことに体調不充分なため遠見小屋より下山、行動したのが2日間。合宿入山前7日にかぜをひいてしまった。入山すれば治るだろうという甘い考えで入山したが、2日間の行動を終ったあと、熱のためぐったり。入山前の息込みもどこか消えて、次の日下山。自分としては体調不充分のため途中下山したのは初めてであんなみじめな気持は2度と味いたくない。この経験を今後の山行に生かしたいし、他の人達も入山前の体調には充分気をつけて下さい。

吉野

冬山合宿で最大目標それは何であるか?現在我々がのかげてきた鹿島槍attackは本当に合宿の第一目標として良かったのか、我々が山に行くのは、たしかにattackも重要である。しかし、それに対する精神面、技術面での高度なものの要求は冬山という事において当然我々に求められる。冬山には行って来たがそれだけの技術、経験を我々は持っているだろうか疑問である。現在部が成さねばならないものは精神的な満足よりよく広く、より深い冬山技術、生活技術の訓練であり研究である、いままで自分はそれし

を充分やって来たとは思えない。そして冬山合宿にそれをあてはめてみれば、今回は鹿島槍のアタックに目を向けてきた。しかしその前に、より謙虚な気分で自分自身の経験、技術を見つめる事をしたか、また山岳部という組織の中でメンバーの相互の技術経験がまとまって鹿島槍attackに充分であったか、我々は常に死という事に直面する行動を取うざるを得ない。冬山を行なうという人間である互いに批判し合い、足りない所、未熟な点は早く見つけ、山岳部生活トレーニング等により、それを除く必要がある。そして自分自身を強くし、技術的、精神的に信頼出来る山登り人となることを感ずる。我々の山登りの姿勢はattackよりもそれに近ずくための努力により多くの力を入れるべきである。そして、さらに広く深い山へのアプローチを模索し、山に登る人間の共通のものであるものは、山が母であり、そして、その内に入って行こうとする態度である。その時の自分の気持を充れず、流される事なく見失なう事なく、謙虚に、また自信をもって、ある目標に向って努力することを思う。

井口：

自然はその調和を決して崩さない。異物が進入してくれば"力"を持って異退する。例え人間であろうとも、我々が純すいに客体としてその中に入った時のみ存在を許される。あえて我々が征服者たろうとすれば最早自然との存在の共通点を持たなくなる。決果は「死」のみであろう。しかし人間である我々から主体性を除く事は出来ない。何故なら、そうすれば我々は人間としての存在を否定する事になる。この自然と人間との間に横たわる矛盾を止揚する事、より主体的に変革を行なう事が必要なのだ。その為に我々の行なうべき事は一言に尽きる。アルピニズム（仏々の）の直線的な物質化という事である。それを行なう場は"アルプス"のみではない。下界、トレーニング場etc あらゆる場を"次なるより高き山"へ向けて手段化する必要がある。

雪は深かった。吹雪は激しかった。あたかも山は我々の足跡を許さないが如くその厳を全て示したかの様だった。

そこに我々は為すすべなく退いた。これを失敗ともいおう、又技術不足ともいおう。さらには精神の未完ともいおう。

しかし多分に山行（合宿）を自己目的化している我々の努力一杯ではないのだろうか？より高きを求めるには余りに感覚的ではないのだろうか？この点を反省したい。

「何を得んとて山へ行き、何を得んとて——」

「されど得られず、されど得られず——」

小杉

無雪期の山と異なり、冬山はその様相を一変した。悪条件の上に更に又悪条件が重なり、もはや人間の力でそれを征服出来ないほどの威力となってしまった。自然の核をその中に見い出した気もする。正直いってものすごい敗北感を味わった。それは自然に対する恐しさからでもあり又、諸先輩なしでは、どうすることも出来ない自分の惨めさでもあった。自然に立ち向う時なのに、雑念を持ち込み、チーム・ワークを乱したからでもあった。だがここから得るものも大きかった。この合宿が自然に対応する自分の礎となる様に勤めるべきだと自覚しています。

自然が微笑んでいた時の鹿島の北壁はとにかくすばらしかった。

芝井

自分のズルの甚だしさを思い知らされた合宿だった。

更新に対する自信のなさ、バテに対する不安、結局はバテてしまい、皆様に迷惑をかけてしまった。テント生活でも二日目お米をこぼし、はて又合宿終り頃には包丁で指を切るなど殺り所がでてしまった。又寝すごしたことなど。冬山については、入山前に先輩に聞いたり、本を読んだりして自分なりの概念というものを持っていたが、いってみて大体思っていたとおりだったが実際にふぶかれ、ラッセルし生活してみるとやっぱりおっかないと思う。実際自然の斜面の下りでは死ぬかと思った。これおそかなかった経験を今後に生かしたいと思っています。

小林

入山前になって足を痛め、入山出来なかったことは残念でありました。皆が山に登っているのに自分一人下界でぼけっと計画、立案を見ながら今頃はどの辺を歩いているなどと考えたり、冬山の厳しさを自分なりに考えたり、遭難のニュースを聞き、我々の出発部でなかった事にほっと胸をなでおろすありさまで、一日一日として、自分が同行していないことに対し孤独なさみしさ日々でありました。ケガとか病気で入山できなくなるというような事が2度とないように気を付けたいと反省しています。